

生活世界的時間の危機

——エトムント・フッサールの現象学的分析から——¹⁾

Kim Tae-Hee *

訳 小林 琢自**

I. 序論

本稿の課題は、客観的時間のふたつの層、すなわち生活世界的時間と自然科学的時間の関係を論じることにある。客観的時間の問題は、時間意識に関するフッサールの現象学的分析を画定する問題群の中でも、最も重要なもののひとつである。時間意識についての1905年の講義において、フッサールはこの客観的時間の問題を、現象学的分析の究極的な挑戦と呼んだ。「時間の流れの中で、過去への絶えざる沈下の中で、流れることのない、絶対的に固定された、同一の、客観的時間が構成される。このことが問題である」²⁾。換言すれば、それは「時間意識について論明し、客観的時間と主観的時間意識とを正当な相互関係に置いて、そしてどのようにして時間的客観性が、つまり個体的客観性一般が主観的時間意識の内部でいかにして構成されることが可能になるのかを理解しよう」³⁾と試みることである。

たしかに、フッサールが時間意識の現象学的分析に用いた最初の方法は、客観的時間の解体（Abbau）だった。この分析は第一に客観的な時間を主観的な時間意識へと還元するために破壊する。しかしながら、フッサールの初期の分析でなされたこの客観的時間の解体という方法は、後の研究者たちを、客観的な時間はそれ自体では現象学的分析の主題にはならない、という

* 建国大学教授

** 立命館大学文学部非常勤講師

誤解へと導くことになった。このような誤解は、フッサール自身の分析の不十分さによって引き起こされたという面もある。しかし現象学的還元の意味を正しく理解するならば、この解体によって明証的に見て取られた基礎的な諸現象にもとづいて、現象学的研究がさらに諸現象の構築（Aufbau）に着手するというのも認められざるを得ないだろう。このような諸現象は、新たな意味で再発見されるために、解体されてきたのである。言い換えれば、解体が、現象学的な導きの糸（Leitfaden）となる構成された対象から、構成する経験へと遡行するための方法であるのに対し、構築はこのような諸経験が構成された対象へと超越していく過程を確認するための方法なのである。ここでは重要なのは、現象学的方法論のより一般的な文脈において、時間意識についての現象学的な分析が、時間の起源が何であるかについて探求しているだけではなく、このような起源にもとづいていかにして客観的な時間が構成されてきたのかについても探求しているということを見落とさないこと、である。

他方、主観的な時間意識にもとづいて構成される客観的時間が極めて重要であるにもかかわらず、フッサール自身にとっても、これらの問題についての体系的で徹底的な研究が不十分であり続けてきたことは否定できない。内的時間意識についての講義の後、約10年間にわたって継続されたフッサールの研究——主にフッサリアナ第10巻（Husserliana X）において見出される——においてのみならず、ベルナウ草稿（Husserliana XXXIII）やC草稿（Husserliana materialien VIII）のような後期の草稿群においても、フッサールは、主観的な時間意識に基づく客観的時間の構築よりはむしろ、超越論的現象学の視点から、主観的な時間意識を構成する絶対的な意識と呼ばれる超越論的な主観をより深く解体していくことに、焦点をあてていた。このような方向づけの結果として、フッサールの研究にとっても、後の現象学者たちにとっても、客観的時間の構成という問題が——まして生活世界的時間と自然科学的時間との関係という問題は言うまでもなく——議論の中心から、抜

け落ちてしまった。もちろん、「このようなフッサールの問題のまさしく核心において」「時間経験の現象学と時間の物理的 - 数学的な復権との関係」の重要性を指摘する研究者たちもいることについては、十分な注意を払わなければならない⁴⁾。この場合、このような問題は、主観的時間（経験された時間）と客観的時間（物理的で数学的な時間）との関係の問題をめぐる文脈に位置づけられている。本稿では、先行する諸研究と比較しながら、客観的時間を生活世界的時間と自然科学的時間とに区別する限りで、客観的時間の構成という問題について一般的に扱うことができる、ということ論じたい。

本稿では、生活世界的時間と自然科学的時間の関係、すなわち客観的時間のふたつの異なるレベルに注目しよう。両者の関係を主題化するために、生活世界と科学世界との一般的な関係について、ふたつの中心的な概念をまずは考察しなければならないだろう。すなわち、理念化（Idealisierung）と流入（Einströmen）である。というのも、科学的世界は生活世界の理念化を通じて現れるからであり、逆に、科学的世界は生活世界へと流れ込んでいくからである。生活世界の理念化についての徹底的な議論はこれまで数多くなされてきた。しかしそれに比べて流入という現象についての考察は待ち望まれたままである。

この流入という現象に対してあまり注意を払ってこなかったがゆえに、フッサール以降に生活世界について研究してきた人々は、生活世界の概念にかかわる困難やパラドックスを克服することができなかった。これに加えて、生活世界のこのような理論に対する深刻な誤解が登場した結果、理念化の成果によって汚されていない、いわゆる純粋な生活世界（pure life-world）の具体的存在というようなことが論じられることになった。だが、流入という概念を考慮するならば、歴史的に存在している生活世界が、このような流入から影響を受けないということはあるにない。生活世界は常に流入によって浸食され続けている。

したがって本稿においては、これまで比較的関心を惹くことが少なかった

ふたつの主題について論じていくことになる。第一に、「時間意識」の現象学的分析という文脈において、客観的時間の構成について十分に理解するために、客観的時間のふたつのレベル、すなわち生活世界的時間と自然科学的時間を区別し、両者の関係へと注意を転じることが必要となる。第二に、「生活世界」の現象学的分析という文脈において、生活世界の問題にかかわる困難とパラドックスを克服するために、また、この概念の決定的な重要性を明らかにするために、流入という概念についていっそう真剣な考察と精査が必要となる。その際、自然科学的時間を、流入という一般的な現象の典型的な事例として考察しよう。このことによって近代科学の危機に対する応答として示された、生活世界についてのフッサールの理論がもつ重要な意義を強調することになるだろう。このような考察を展開していくために、本稿においては、主観的な時間意識に基づく生活世界的時間の構成に注目する(第二章)。次いで、生活時間的時間の理念化による自然科学的時間の構成に注目する(第三章)。最後に、生活世界への自然科学的時間の流入に注目する(第四章)。

II. 生活世界的時間の構築

時間意識の現象学的な分析はまず、客観的時間を解体し、主観的な時間の意識へと立ち還る。その際、われわれの前に現れる第一の「現象学的な与件」は、「時間統握、すなわち客観的意味での時間的なものが現出している体験」である⁵⁾。これらの時間統握の中で、最も基礎的な諸体験は、すなわち「原時間」である。この「原時間」とは、「時間的なものの根源的な差異」としての原印象、把持、予持に他ならない。これらの原初的な差異は、「時間に関する一切の明証の源泉として直観的妥当的に構成されてくる」のであり、「経験を多様化する基準」を提供する⁶⁾。それゆえ、これらの主題、つまり最も単純かつ最も自明(self-evident)な原初的時間的差異へと還元した後に、

われわれはいっそう錯綜し自明でない主観的な時間体験、例えば再想起 (Wiedererinnerung)、予期 (Erwartung)、想像 (Phantasie) 等々を研究することができる。こうしたものすべては上記の差異に基づいている。

しかしながら、ただ原印象、把持、予持に基づくというだけでは、客観的時間の時間的な順列はいうまでもなく、主観的時間の時間的な序列でさえ、構成することができない。主観的時間は、「自然の、すなわち物理的および心的物理的な自然の形式という意味における客観的時間」ではないけれども、依然として「超越論的な客観性の形式」であるところの「第一の、最も基礎的な時間形式」を有している。それゆえ「現象学的な時間とはすなわち、諸体験が現象学的なプロセス、つまりこの時間の経験として客観性をもつような、時間なのである」⁷⁾。したがって原印象、把持および予持に基づいて「統一された・均質の客観的時間の意識」をもつためには、「各時点の個性が過去へ沈没する際にも保持されている」というだけでは充分ではない⁸⁾。ある時間秩序をそなえた主観的時間を構成するために、諸々の内在的な時間 - 客観は時間位置を変えてゆくにもかかわらずそれぞれ不変の同一性を持っていなければならない。また、主観的時間において内在的な時間 - 客観の同一性を構成するために、原印象、把持、予持のような基礎的な時間的変様の連続を持っていることでは充分ではない。このため、かつての作用を再生し、さらにこの再生を任意に繰り返し行うことで、客観を再び想起し同一化する能力が必要となる。「わたしは『いつでも』『その存在』が同じものと確信することができる」⁹⁾。かくして、ただ原印象、把持および予持のような基礎的な時間的変様に基づくだけでなく、それを超えて、想起や予期といった時間的経験に基づいて、いわゆる主観的な時間が構成されるのである。

しかし、たとえそのような仕方で構成された主観的時間がなんらかの客観的性格をもつとしても、それは真正の意味での客観的時間でない。真正の意味での客観的時間は、個々の主観的時間意識を越えて間主観的に存在する時間でなければならない。そのような仕方でわれわれすべてに対して同一の時

間として現われるのが、真正の意味での客観的時間である。主観的時間はそれぞれの個別的な主観の知覚や記憶といった諸作用とさらに緊密に絡み合っており、他方、客観的時間はそのような客観的時間が私に原則としては直ちに現われることができない時間の相つまり、例えば私が夢見ずに眠っている時間、私が生まれる前の時間、あるいは私が死んだ後の時間といった相を含んでいる。

こうした同一の時間としてわれわれすべてに対して現われる客観的時間は、コミュニケーションによって構成される。(発生的現象学の観点からすれば、この客観的時間は、個別の主観同士の能動的なコミュニケーションによってはじめて構成されるのではなく、まだ完全に成長しきっていない主観同士の受動的な相互作用によって構成されるということが言われるだろう。だが、拙論ではこの主題に関しては紙幅の都合上割愛せざるをえない。) フッサールはコミュニケーションによる間主観的時間の構成について以下のよう記述している。

「他者が私に彼自身の過去の体験を説明したり、彼の記憶を打ち明けたりするような、間主観性に関わることがらを考慮に入れたとしても事情は変わらない。すなわち、彼が想起するものは、わたしやわれわれの共通の体験現在において与えられたものと同じ客観的世界に属している。これら様々に想起された環境世界はすべて同一の客観的世界の断片である。この客観的世界は、最も包括的な意味における、相互理解可能な社会における人間性にとっての生活世界としての、われわれの大地であり、諸々の変化や過去をそなえたこれら多様な環境世界のすべてそれ自身のうちに含んでいる。(・・・) 私が今根源的に知覚するもの、これまで知覚してきたもの、また今想起できるものや、それについて他者が知覚や想起したと私に伝えるだろうもの、そうしたもののすべてがこの唯一の世界の中に存在する。そうしたすべては、この客観世界にそれぞれの確固たる時間的位置、つまり客観的時間における位置

を占めることによって、統一をなしている」¹⁰⁾。

このような、諸々のコミュニケーションによって間主観的に構成された客観的時間とは「端的に間主観的な経験の世界」としての生活世界の時間である¹¹⁾。また、この客観的時間の意味は、主観的な固有の intrinsic 時間性を越えた本質的な「余剰」を備えている。個々人の時間意識という基礎の上で間主観的に構成するこの「生活世界の時間」は、「流れにおける現在の生活世界の時間」および「われわれにとって存在するものの形式としての時間」である¹²⁾。超越論的主観性たちの共同体において、われわれはこの現在に共に在り、また、超越論的主観性同士のこのような基礎的關係そのものが、生活世界の間主観的時間において明証的に在る。つまり「純粹なモナダ的（現象学的）経験（自己経験および他者経験）によって確証されてゆく存在の現実性にしがって」、「各モナダはそもそもそれ自身が自らの存在をめぐって他の諸々のモナダと関係している。互いに対する存在としての存在というこの基礎的關係は、自明的に間主観的時間における共存關係である」¹³⁾

以上、客観的時間の解体と主観的時間への立ち還りをとおして、われわれはまず原印象、把持、予持という「時間の起源」に達し、そしてこの基礎に基づいた再構築をとおして、主観的時間の構成を再発見し、さらには第一の客観的時間としての生活世界の時間を見出した。今度は、生活世界的時間の理念化による自然科学的時間の構成を考察する時である。

III. 自然科学的時間の構成

1. 理念化

フッサール現象学における生活世界の概念は、1920年以來使用されてきた¹⁴⁾が、1936年に公刊された『危機』書において中心的な役割を果たしている。これは西洋文明の危機とフッサールが見なした事態に対する応答として冒

頭に記されている。フッサールの分析によれば、西洋文明の危機は、諸科学の危機によって本質的に引き起こされている。そしてこの諸学問の危機は、直接的・直観的な経験の世界、すなわち生活世界こそが諸学問の起源であるという事実を忘れた近代科学によって生じたのである。

このような文脈において登場した生活世界という概念は、フッサール現象学の諸概念のうちでも、哲学およびその他の諸学科に多大な影響を及ぼした概念である。生活世界の概念は、西洋哲学史におけるドクサとエピステーメーの古典的ヒエラルキーを克服し、日常生活の意識としてのドクサを復興させる点で重大なインパクトをもっている。プラトンの洞穴の比喻以来、ドクサはエピステーメーと比して軽視されてきた。生活世界における様々な知を「単に」主観的かつ相対的なものと見なす言説には、「古い遺産、つまりドクサという侮蔑的な意味合い」が現れている¹⁵⁾。しかし、生活世界というフッサールの思想は、まさに日常の意識が「自明性の源泉」であり、科学的な知にとっての「検証の源泉」であることを示している¹⁶⁾。生活世界は、このような「意味の世界、感性的直観の世界、諸現出の感覚可能な世界」¹⁷⁾であり、それゆえ「科学以前の、また科学以外の生活」である¹⁸⁾。他方で、生活世界における知識は、主観的、相対的、曖昧であるが、こうした直観に基づく知識こそが科学的世界における知識の妥当性の根拠を与える。したがって、生活世界は生活の実践的な範囲として、「根源的な明証性 (Evidenz) の王国」¹⁹⁾であり、さらに科学的世界に対してはそれが生成するための基礎を与えている。だが生活世界を脱する科学的世界の生成を解明する際には、ここで決定的な役割を果たしている、理念化という概念を詳しく見なければならぬ。

第一に、科学的世界以前かつ以外の実践的世界としての生活世界において、事物に関する知識は「(単に) おおよそのもの、類型的なものの領域にある」²⁰⁾。「直観的な環境世界の事物は、総じて、そのあらゆる性質において、単に類型的なものの範囲で変動する」²¹⁾ のであり、その類型の精密さに

は一定の限界がある。しかし日常の経験において、われわれはそうした限界を当たり前のこととして、それに疑いをさしはさまない。われわれの日々の経験は通常、特定の実践的関心によって導かれており、それゆえ、おおよその、類型的な知識が「特定の实践的関心を十分に満たす」限り、そうした知識以上のことを求める必要がない²²⁾。

だがもし、私たちが実践的な関心に基づいて「実際に実践する代わりに」理論的な関心に基づいた「純粋な思考」という理念的な実践を行なうならば、そこでは日常生活の精確さを超えた理論的なレベルでの完全な精確さが要求される²³⁾。理念化は、この、完全化という要求から生じる。理念化は、日常の実践的生活における精確さの追求を超えて、無限にいたるまでこの追求を継続する。確かに無限の完全化はそれ自体不可能ではあるが、「不変の到達不可能な極」—「その普遍的形式は副次的に理念化された空間-時間の形式である」—としての「極限形態」(Limes-Gestalten) を獲得するために仮定される²⁴⁾。

このような理念化の方法は、古代の幾何学において既に示されていたが、近代数学と結びつくことで決定的な飛躍をとげた。唯一、数学だけが、理念化に基礎を与える無限の思想を最大限具体化することができたからである。歴史的に見れば、この数学的な理念化はガリレオによって完成された。ガリレオは、世界の包括的普遍的な数式化が可能だとする仮説を伴った近代科学の発展に決定的に寄与した。

「ガリレイによる自然の数学化によって、新たな数学の指導の下に自然自体が理念化される。つまり、現代的に表現すれば、自然自体は数学的多様体となる」²⁵⁾。ここで問題となっている真なる世界とは、直接的直観的な経験によってアクセス可能な世界ではない。真の意味での世界とは、そのような直観的な世界の背後に存在するものとして、かつ数式によって量的に精密な仕方でも確定可能な世界として確定される。そのような完全なる数学的な理念化によって生成された科学的世界は、有用性と起源(つまり生活世界)という

自らの基礎から切り離され、それ自身の客観性と確実性を保証する。さらに、科学的世界は生活世界の基礎であるという装いをそなえてさえいるのである。その結果、理念化は、近代自然科学にとって、同様に近代の世界全体にとっての世界観と方法論の基礎の座に登りつめる。

フッサールの分析によれば、近代自然科学の方法論がその権限を逸脱し、生活世界的な経験の妥当性を侵食する方向で生活世界へと浸透した事実によって、西洋文明の危機がもたらされた。それにしたがって、生活世界、つまり「顕在的な共通の現在」すなわち「近隣世界 (Nahwelt)」²⁶⁾ は、「理念の衣」²⁷⁾ におおわれてその内部を歪められる。そして、「自然科学の意味基盤としての生活世界」が忘却²⁸⁾ されたことで、「技術化」による数学的な自然科学の意味の空洞化²⁹⁾ が生じたのである。

2. 時間の理念化

生活世界の理念化は、生活世界の時間に対しても同様に生じる。ここでは、自然科学的時間が構成される「時間の理念化」³⁰⁾ について確認したい。そのためにまず、生活世界の時間性の特徴を考察しなければならない。生活世界の時間は、このリズムにしたがって昼夜のくりかえし、季節のめぐり、労働と休憩の時間等々といった自然なリズムなどを包含する、実践的な日常的な時間である。A・シュッツは生活世界的な時間の構造を次のように記述している。「生活世界的時間の構造は、意識流の(内的持続の)主観的時間と、いわゆる「生物学的な時間」一般としての身体のリズムとが、また世界時間一般としての、あるいはカレンダーないし「社会時間」としての季節とが重なり合うところに構築される。われわれはこれらすべての次元を同時に生きている」³¹⁾ この生活世界的時間においては未だ究極の客観的時間、すなわち自然諸科学の中核、特に物理学の精密測定を可能にする「数学的時間」³²⁾ は確立されていない。しかし、「この数学的实践において、われわれは経験的实践においては決して到達しえないもの、すなわち『精密性』(Exaktheit)に

到達する」³³⁾。

その結果、「経験的直観的な多様な形態がその内部に入っていると考えられる生活世界の漠然とした一般的な形式から、はじめて真の意味での客観的世界を、すなわち、一義的に、方法的に、全ての人にとって完全に普遍的に、規定可能な理念的対象性の無限の全体性をつくりだした」³⁴⁾。そして「論理的かつ数学的な無限」としての「自然の無限」は、「精密な自然科学の主題」である³⁵⁾。

では、「数学的時間」は、こうした生活世界の時間からどのように生成するのか。「直観的に与えられた自然や世界は数学的世界、つまり数学的自然科学の世界へと変形される」³⁶⁾。こうした数学的世界は「時間の理念化」によって生成された数学的自然科学の時間を有している。固定された時間位置から成る線形順列としての客観的時間は、そのつどの直観的な時間的経験を超越した数学的理念化によって現われる。生成されたこの自然科学的時間が有するのは、数量化可能性の理念、精密測定可能性の理念、無限の理念である。歴史的にみれば、これらの理念は近代自然科学の初期における理念化の成果である。

それゆえ、客観的時間に関する自然科学のこれらの了解は「客観的時間に関するわれわれの日常的な了解における特殊な展開」である³⁷⁾。だから、生活世界的時間と自然科学的時間は、客観的時間の二つの様態あるいは二つの層であり、後者が前者の理念化によって構成されるという関係にある。

この自然科学的時間の特性のうち、もっとも重要なものの一つとして、均質化がある。この均質化が過去・現在・未来の質的差異を消し去る。生活世界はそもそも「なじみの類型に満ちた環境世界 (Umwelt)」³⁸⁾であり、この世界は環境世界として「『時間の流れの中で』空間 - 時間という不変の形式を保持している」³⁹⁾。生活世界のこうした時間形式は時間の基礎的かつ根源的な経験として、絶えず変化する現在をもっている。その内部で未来の出来事が過去となってゆく。この観点から、生活世界の時間的経験の核心は、

現在という時間点で分割される過去と未来の差異である。過去はすでに確定されており、未来は未だ確定されていない。したがって、出来事の順列は、過去へではなく未来へと流れてゆく。

だがこの時間的理念化は、運動変化をいっさい被らない事象の固定された時間を形成する。したがって、数学的な自然科学的時間は、顕在的現在に、あるいは流れる時間というメタファに対してどんな特別な意味をも認めない⁴⁰⁾。それゆえ「客観的時間という表題の下では、各々の時間点それぞれ自身の連続体、つまり現在の様態と、諸々の過去の連続体の様態との間の差異が完全に消え去る」⁴¹⁾。

一個の客観的時間は、方向定位の絶対点としての不動の「今」に対する相対性を消失した「諸々の時間点の均質化によって」構成されている。つまり、「このような、一切の参照点を持たない均質な位置系列として客観的時間を構成することは、悪名高い時間現象の空間化を承認することになる」⁴²⁾。

したがって、この自然科学的時間は均質的時間として、数量化され精密に測定可能な空間化された時間である。この自然科学の時間においては、時間と空間は峻別不可能である。この客観的な「時間はわれわれが線形多様体と呼ぶ形式の連続体であり、純粹概念および純粹カテゴリーによって規定可能である」⁴³⁾。だがこの記述は、空間における直線にも同様に適用できる。そうであれば、時間的な線形多様体と空間的な線形多様体の差異はどこにあるのか。この差異は「いわゆる資料的な成素」にあり、空間線の場合の「空間点」、あるいは時間的線の場合の「時間点」のいずれかということになる。しかし、これらの二種類の点が互いからどのように峻別可能かという疑問については、「われわれは『見よ!』ということしか出来ない」⁴⁴⁾。「数学、および数学的物理学は抽象化作用の内部にとどまるので」、それらの学は時間と空間の差異について説明できないのである⁴⁵⁾。したがって、「この純粹な生活世界、つまり先科学的な意味における実在世界」から発して、抽象的「空間化時間性（同時性と継起性としての時間性）」が出現しているのである⁴⁶⁾。

IV. 生活世界への自然科学的時間の流入

1. 流入

これまで、生活世界の理念化に注目することで、科学的世界の起源について記述してきた。しかしながら、科学的世界そのものの出来が近代諸科学の危機を引き起こすのではない。生活世界が「理念の衣」をとおして現れ、近代諸科学が、自らの意味の基礎としての生活世界を忘却したその時点で初めて、危機は引き起こされる。ではこの現象はどのように起こるのだろうか。科学的世界が生活世界へと流れ込みかつそれを支配する、ということが起きている。したがって、生活世界が容易に忘却されてしまうことを理解するために、この流入という現象をより具体的に考察したい。

流入という概念は一般に、「特別な態度、すなわち理論的態度において獲得した知識をとおして生活世界的な意味内容を拡張する現象」を示している⁴⁷⁾。この概念は、科学的知識を「現実の経験世界において行われる実践の内部に」「置き戻して適用すること」を前提している⁴⁸⁾。日常的な直観的世界へ理論的知識が流入するというこの現象は、技術という現象にとりわけ顕著に現われる。例えば、「数学は測定術と結合して現れ、ついでそれを指導しつつ—そうすることによって数学は、理念的な対照の世界から再び経験的に直観される世界へと下降してくる—直観的現実的な世界の諸事物について、まったく新たな種類の客観的に真なる認識を普遍的に獲得することが可能である」⁴⁹⁾。例えば、家電製品を使用する際、われわれは通常これらの装置の科学的原理を主題化することはない。というのも、理念化をとおして獲得された知識のすべてがわれわれの潜在的な実践性の奥底に、主題化されない沈殿物として既に定着しているからである。言いかえれば、理念化によって、それも特に数学と自然科学における理念化によって獲得した知識はすべて非科学的な実践の直観的地平つまり生活世界へと流れ込み、そして生活世界の成素となる⁵⁰⁾。

この流入という概念に注目することによって、われわれはいわゆる生活世界の両義性という概念を適切に理解する可能性を獲得できる。フッサールの理論では、生活世界はふたつの仕方 で定義される。

一方で、生活世界は科学以前の「直観的世界」である。そして他方、生活世界は科学と技術の成果を包含する「文化的世界」でもある⁵¹⁾。このような生活世界の相反する定義は、異なる二つの観点によって引き出されている。すなわち一方は、「純粋な生活世界」という遮断する観点であり、他方は、生活世界への科学的世界の流入を含んだ「普遍的な生活世界」という観点である。したがって、この相反する定義を、したがって二つの観点つまり純粋な生活世界と普遍的な生活世界との関係性を正確に理解するなら、近代科学の危機の原因となった容易に忘却されてしまうという生活世界の特性を適切に分析し克服する可能性を手に入れられる。

さて、以上のことに留意しつつ、フッサールが生活世界 の概念をどのように使用していたのかを詳しく見てみたい。前述のように、生活世界の第一の定義は、科学の非直観的世界と「対照」された先科学的な直観的世界というものである。この根本的な意味においては、生活世界は、「科学の外の、かつ科学以前の感覚的・直観的世界」であり、科学的な知識の起源と妥当性に基礎を与える。

しかしながら、生活世界的直観を超越する理論的な実践の成果、とくに、理念化に基づく近代科学の功績や技術的な実践の成果が、生活世界の直観の地平へと流れ込む。客観的な諸科学において、「われわれはこの客観性という目標設定(真理それ自体という目標設定)によって純粋な生活世界を超える一種の仮説を立てる」⁵²⁾。しかし、この純粋な生活世界は、「その完全充実した具体性における」⁵³⁾「本当に普遍的な生活世界」⁵⁴⁾の一部分にすぎない。普遍的な生活世界には、科学と技術の成果を含む文化的成果のすべてが既に流れ込んでいる。普遍的な生活世界は、「そこへとすべての作業が流れ込む」 「普遍的な連関」であり、「すべての人間やすべての作業活動や能力がつねに

そこに属している」⁵⁵⁾。それゆえ、これらの流入を通じて、生活世界はもはや科学以前・科学以外の実践の地平であるだけでなく、本質的に直観を超えた科学的実践にとっての地平でもある。この意味で、「具体的な普遍性」⁵⁶⁾を備えた普遍的な生活世界はすべての人間的実践の普遍的な地平である。

したがって、たとえ生活世界と科学的世界が互いにまったく異なる世界ではあっても、ある種の仕方ではそれらは互いを含みこんでいる。もちろん、この関係に対する考察によって「やっかいな状況」⁵⁷⁾ないし「耐え難がたい困難」⁵⁸⁾に突き当たる。つまり一方では、「客観的な科学的世界についての知識は、生活世界の明証に「基礎づけ」られている」⁵⁹⁾。だが他方では、「科学のすべても、われわれも共に、単なる「主観的-相対的な」生活世界へと、引き寄せられてしまう」⁶⁰⁾。一方で「対照関係」にありながら他方で「分ちがたく結合」しているという、この「客観的に真なる世界」と「生活世界」との逆説的な相互依存関係は、「全てを包括する、背理的な生活世界の在り方」である⁶¹⁾。しかしながら、この、いわゆる生活世界の両義性がふたつの異なった観点からくるといふ事実留意すれば、われわれは、「客観的に真なる世界と生活世界の両者それぞれの存在仕方についての」「不可解な」謎を解決する手掛かりを見出し、流入を排した純粋な生活世界概念と流入を含んだ普遍的な生活世界概念とが必ずしも互いに矛盾する必要がないことを認めることができる⁶²⁾。それゆえ、「原則的に直観可能なものの宇宙としての生活世界」と原理的に直観不可能な「論理的」基礎としての「客観的に真なる」世界との間の「対照」は、もっぱら生活世界に関するフッサールの理論におけるはじめの暫定的な同定として記された、ということを確認すべきであろう⁶³⁾。というのも、科学的世界の成果が流入する、という現象を重大なものとし、生活世界の地平におけるものとして理解した場合には、生活世界の究極的な概念が「具体的な普遍性」として現れるからである。

こうした生活世界に対するふたつの観点に基づいた区別によれば、われわ

これは純粋な生活世界と普遍的な生活世界をどのように研究すべきだろうか。この問題を考察するためには、とりわけ、生活世界の存在論に関する自然的態度と超越論的態度の関係が考察されねばならない。一方で、「あらゆる超越論的関心を抜きにしても、つまり「自然的態度」(超越論的哲学の言語でいえば判断停止以前の素朴な態度)の内部でさえ、単なる経験世界としての生活世界の存在論というひとつの独自の学の問題となるだろう」⁶⁴⁾。さらに「これまでわれわれは、いままでは常に超越論的判断停止という態度変更において体系的省察を遂行してきたが、いつでも、自然的態度を回復することができ、その態度においても生活世界の不変の構造を探求することができる」⁶⁵⁾。他方で、「この点に注意した上で、再び超越論的態度へと、つまり判断停止へと立ち還るなら、生活世界は超越論的哲学的の文脈において、単なる超越論的『現象』へと変化する」⁶⁶⁾。その結果、「判断停止の内部で、われわれはその眼ざしを首尾一貫して、もっぱらこの生活世界ないしそのアприオリな本質諸形式へ向けることができる。そして他方、この視線をしかるべく向け換えて、生活世界の「諸事物」ないし事物形式を構成している相関者、すなわち与えられ方の多様性とそれらの相関的な本質形式へと眼差しを向けることができる」⁶⁷⁾。前者は、自然的態度における生活世界の存在論の主題であり、後者は超越論的現象学における生活世界の存在論という独特で本質的な主題である。

このように、超越論的現象学が判断中止の内部で「この生活世界ないしそのアприオリな本質諸形式」に「もっぱら」焦点を絞るならば、生活世界の存在論を遂行することができる。この場合、生活世界についてのふたつの異なる観点によれば、生活世界の存在論は、普遍的な生活世界の学と純粋な生活世界の学とに区分される⁶⁸⁾。まず、普遍的な生活世界は、科学的な成果の流入と沈殿によって豊かになり続ける歴史的なプロセスの現時点での結果としてのみ具体的に現実存在することができる。そのうえ、この普遍的な生活世界は、多様な特殊世界(Sonderwelten)として具体的に存在する。多様

な特殊世界には私たちが親しんだ生活世界が故郷世界（Heimwelt）であり、その他の生活世界は異他世界（Fremdwelt）である。とりわけ、われわれに具体的に与えられた複数の普遍的な生活世界についての諸研究の一つとして、近代自然科学の数学的な理念化の発生以来、近代の生活世界に関する研究が可能であり、成し遂げられねばならないだろう。

しかしわれわれは、これらの複数の普遍的な生活世界に関する研究を越えて、科学的世界の流入なしで存在する、科学以前の、科学の外にある生活世界の想定によって、純粋な生活世界に関する研究を行なうこともできる。こうした純粋な生活世界をめぐる研究は、「そのあらゆる相対性という特徴において、示されている」「普遍的構造」⁶⁹⁾、すなわち「生活世界のアプリアオリ」⁷⁰⁾ についての研究となる。「客観的な諸科学は、「それ自体で」存在し「真理それ自体」において規定されている世界の基礎として、ある構造を前提している。生活世界としての世界は、すでに科学に先立って、この客観的な諸科学が前提しているものと「等しい」構造をもっている」⁷¹⁾。言い換えれば、純粋な生活世界に関するこうした研究は、「科学以前に、世界はすでに空間時間的世界」と想定している。「もっとも、この空間時間性に関して理念的な数学的点とか「純粋な」直線や平面とか、幾何学的アプリアオリの意味に類する「精密さ」は問題になっていない」⁷²⁾。こうした研究は、「空間時間的な「存在者」のための」「具体的に普遍的な本質学として理解された生活世界の存在論」と理解することができる⁷³⁾。

さて、これまで、流入という現象一般について見てきたが、以下では、この概念を時間の問題に適用することにより、生活世界的時間への自然科学的時間の流入現象について確認しよう。

2. 自然科学的時間の流入：時計時間（Clock-Time）

生活世界へ流れ込んだ科学と技術の成果は普遍的な生活世界の一部として含み込まれている。これと同様に、生活世界へ流れ込んだ自然科学的時間

が生活世界的時間の一部として現われる。近代社会においては、生活、すなわち「具体的な普遍性」としての生活世界のあらゆる領域が、理念化によって生成された理念的な存在として自然科学的時間によって普遍的に侵食されている。時計時間によってこの現象は最もはっきりと示されている。以下では、これについて詳しく見てみたい。自然科学的時間は連続的かつ均質的な時間であり、それは無限に分割され、数量化され、様々な種類のクロノメーターによって精確に、測定可能である。時計は、この自然科学的時間を技術的に履行しながら、生活世界の中へと深く浸透し、普遍的な生活世界における支配的地位を獲得している。

しかしながらフッサールは、生活世界への自然科学的時間の流入という問題を具体的に分析してはいない。自然科学の時間と生活世界の時間時間との峻別よりも、むしろフッサールはこの両者について、「時計やクロノスコープを使って確定する客観的な時間の流れ」として、「地球と太陽に結びつけてわたしが確定する世界時間 (Weltzeit)」として記述している⁷⁴⁾。とすれば、自然科学的時間が生活世界へと流入してきたこの歴史的なプロセスについて、適切に記述する可能性を探るべく、フッサールの分析を超えて行かねばならない。

第一に、われわれは、「時間の精密な測定という思想が歴史上、近代の自然科学の始まりにおいて生じた理念化に起因したものであり、それゆえ、それが客観的時間についての日常的な了解が特殊に発展したものである」⁷⁵⁾ という事実を認めるだろう。そうした「さらに高次の抽象をとおして特徴づけられた西洋の時間概念による特殊な支配」は、「様々な時間測定法および時計の技術と歴史、そしてそれらのこれまでの社会的利用」において最も顕著に現れている。このことをとおして、「多様に異なる「地域時間」を脱した」 「一つの支配的な (西洋的) 時間概念」が出現する⁷⁶⁾。

それは「数学的および物理的な関係性の観点からする時間の標準的な参照や科学的な定義において、時計時間を疑似的 - 普遍的に利用することで最高

潮に達する」プロセスである。「[「外的な」ものとしての時間概念]は、ニュートンの思想では、それ自身の本性から「流れ」ており、また時計の時刻によって具体的な表現をなんとか得ている」。これが時間についてのわれわれの日常的な了解を侵食し支配してゆく⁷⁷⁾。

この時計時間の第一の決定的な特徴は量化可能性である。時間の量化可能性は、多様な時間性のあらゆる質的差異を除去し均質化することで現われる。この時間的な数量化に基づいて、時間の無限の可分性〔分割できる性質〕、および精確に可測性〔測定できる性質〕が手に入る。時計は、この量化可能性、無限可分性、精確可測性をそのまま技術によって履行したものである。生活世界の中で時計を普遍的に「再適用」することで、いまや普遍的な生活世界の時間は、均質的な諸々の持続の量において分節され、それゆえ計測され精確に計算されうる存在として定義される。こうした生活世界的時間の数量化によって、同一の客観的時間的秩序をそなえた生活世界におけるあらゆる実践が、時間の面から数量化され評価されることにもなる。さらには、精密かつ効率的な仕方と同時にあるいは引き続き執り行われるべく、この時間に照らしつつ実践同士が相互に調整される。時間の数量化が完了するまで多様な時間性の間の質的な差異が消去されるならば、時間は始まりも、切れ目も、終わりもない一本の無限な直線として現れる。しかしながら、フッサールにとって「具体的に経験される時間世界 (Zeitwelt) としての」生活世界はそもそも「周期的世界」である⁷⁸⁾。しかし時計は、生活世界のそうした周期的な時間を線形の時間へと再編する。明らかにこの周期性は生活世界の日常の実践の中で残り続けている。しかしながら、近代的な日常生活の流れは、自然の周期性にではなく、機械的時間の線形かつ一様な分節化に服しており、それゆえに、生活世界的時間は主に線形の時計時間によって再編成されてしまっている。

時計時間の重要な特徴のうち、もう一方はこの一様性 (uniformity) である。普遍的な生活世界そのものが複数の生活世界として現われるため、生活

世界の時間はそもそも複数の時間として現われる。したがっていまや、生活世界的時間ないし社会的時間にとって、「はるかに包括的で動的な、社会的時間の複数性をも考慮する定義が要求されている」⁷⁹⁾。生活世界において、「通常の間人として、われわれは絶えず同時にさまざまな（拡大された意味での）「職業（Beruf）」（関心態度）のうちに生きている。つまりわれわれは同時に父親、市民、等々である」⁸⁰⁾。それゆえ、それぞれの職業は「ある個人的な時間の内部で、また多くの錯綜した職業時間（Berufzeit）の形式の内部で、そのつど「それに相応しい専門の時間」をもっている」⁸¹⁾。現象学者の態度でさえ一つの職業であり、彼の判断中止は専門の時間である⁸²⁾。様々な職業に取り組む際、われわれは「私なりの生の区切りである顕在的地平」すなわち「異なる現在」をもつ。これは、私にとってのこの瞬間の「世界現在」であり、これに関連して「世界過去」や世界未来が現われる⁸³⁾。さらに、こうした個々の人格のレベルを越えて、それぞれの共同体および文化が、それ自身の時間をもつ。「共同体の生は私に対して、多種多様な形式において現れる」。私がそれぞれの共同体つまり「共同体の異なる現在」に対して採る態度にしたがって、家族や国家といった地平のような異なる時間的地平が私に対して現れる⁸⁴⁾。このような共時的レベルだけでなく通時的レベルにおいても、生活世界は多様な形式において現われる。生活世界は「時間的な近接世界（Nahwelt）と遠隔世界（Fernwelt）とに区別される」のであるから、生活世界的時間は「近隣時間（Nahzeit）と遠隔時間（ferne Zeit）と」に区別される。また、前者に基づいて後者が、世代間をとおして構成される⁸⁵⁾。しかし、自然科学の時間が生活世界へと流れ込むことで、そうした生活世界的時間は多様性を失い、時計時間によって侵食される。時計時間によって、あらゆる存在が、つまり物理的存在、心理学的存在、社会的存在が、同一の「自然」の支配下に置かれ、それら多様な時間性が「自然の時間」として一様化される。いまや「自然」の構造が生活世界の存在論の構造になる。全ての事物が自然の時間、つまり空間的時間（Raumzeit）の内部にそれぞれ位置

づけられる。したがってそれらの中の自然でないもの (Nicht-Naturale) のすべてが、同一の時間の内部に組み込まれてそれぞれ位置づけられる」⁸⁶⁾。最終的には、本質的に客観的に妥当する存在として確立された一個の無限の客観的時間において、自然の事物だけでなく生、身体、意識といった現象をも含むすべての現象は、時計によって指定されうる確定した時間的位置を与えられる。「科学と技術によって改変された時間の形式」が生活世界的構造の心臓部に重大な損害与えた。このことはとりわけ、そうした時間形式を具体化する技術的な装置、すなわち時計が「生活世界における日常生活にとって自明のもの」となったということによるのである⁸⁷⁾。

V. 結語

以上、流入概念について、つまり自然科学的世界がどのように生活世界へと流入していくかについて描き出してきた。純粋な生活世界の理念化の結果としてあらわれてきた自然科学的世界は、普遍的な生活世界の一部となるにいたる。

科学以前に、また科学の外部に存在する純粋な生活世界は、科学的世界の基礎に転じる。科学的世界は、生活世界から歴史的に現出する。そして、その実践は生活世界に支えられて遂行されつづけている。他方で、科学的で技術的な実践の成果は、普遍的な生活世界へと流れ込み、その深みへと沈殿した。かくして、知らず知らずのうちに、さまざまなかたでそのような成果が利用されている。

すでに論じてきたように、科学以前の、科学の外部にある純粋な生活世界が、このような科学的世界の基礎である。このことは、科学的世界が歴史的に生活世界からあらわれてきたということだけではなく、科学的実践が生活世界にもとづいてなおも遂行されているということをも意味しているのである。他方で、科学的で技術的な実践の成果は、普遍的な生活世界へと遡っ

て流れ込み、生活世界の深みへと沈殿している。そうしてわれわれは意識せずにこの成果を適用し利用している。したがって、こうした普遍的な生活世界は、われわれが生活している具体的で歴史的な世界であり、それは、科学と技術も含むあらゆる文化的成果を必然的にともなっている。

だが、科学的世界のこうした流入の結果として、不幸にも、生活世界の忘却という、近代社会に固有の現象が生じてしまう。科学的世界が純粋な生活世界に支えられていて、普遍的な生活世界に属しているということが忘れられてしまうのである。このような忘却の結果、生活世界は科学的世界に従属させられてしまい、科学的世界というひとつの尺度にすぎないものによって評価してしまっている。これは、「数学的に基底づけられていた理念的なものの世界が、われわれの日常的な生活世界に、すなわち、そのみが唯一の現実的世界であり現実の知覚により与えられそのつど経験された、また経験することができる世界に、すりかえられていた」⁸⁸⁾ ことによる。

フッサールの生活世界の概念が、まずもって西洋文明の危機を究明し、克服することを目指していたことに留意するなら、この概念の含意するものを見落としてはならないだろう。そうであれば、この危機から逃れる道はどのようなものか。フッサールの診断によれば、近代社会と近代科学の危機を引き起こしている主な原因のひとつは、客観主義である。この客観主義は、近代のいわゆる客観的科学そのものが、常に、以前も以後もその意味の基礎でありつづける生活世界における（間）主観性の成果であるということを見落としている。だから客観主義は、科学的で「客観的な」世界が生活世界から独立した世界であり、生活世界よりもいっそう根源的なものであると誤解してしまっているのである。

それゆえに、危機を克服するためには、科学の妥当性と生成の基礎として、生活世界を正しく理解しなければならない。流入の肯定的な側面を強調しすぎるとすれば、不明確で楽観的に過ぎる見方をするようになってしまうであろう。だから、純粋な生活世界と普遍的な生活世界の内部にある科学的世界

との関係についてみていかなければならないし、科学的世界が純粋な生活世界を支配し、植民地化している現象について批判的に吟味していかなければならない。また、直観的な経験から〔考察を〕始めるために、純粋な生活世界という「理念の衣」を脱ぎ捨てなければならぬ。時間性そのものが、主観的な意識の生を管理する重要な概念であるだけでなく、生活世界それ自体を組織化する体系と機構でもある限りで、生活世界と科学的世界についての分析と、生活世界と科学的世界の時間性への洞察は、生活世界の忘却〔という問題〕を克服するために、中心的な役割を果たすことであろう。

そのための方法は、生活世界への還元である。時間性に関しては、「純粋な生活世界の時間空間性へと、また、科学以前の意味における実在的な世界へと、最初に空間的時間性（同時性と連続性としての時間性）を還元しなければならない」⁸⁹⁾。かくして、われわれの採る「方法は、現実的な生活世界に、相関的で主観的な経験世界に立ち戻ることを必要とする」。それは、このような生活世界の客観性が、近代科学とその客観的な真理に意味を付与してきたことを想起するためである。そのためには、生活世界へと自然科学的時間の総体が流れ込んでいくことを拒むよりは、むしろ、生活世界の多数性と多様性に対応している、生活世界的な時間の多数性と多様性を取り戻す必要がある。別言すれば、多様な生活世界の多様な時間性へと遡行することに、適切な地位と正当な権利を付与する必要がある。

生活世界の統一は、多様な生活世界の細かい網の目としてのみ、具体的には可能である。いかにして、その適切な地位と正当な権利に関して、生活世界の時間性を取り戻すことができるのかという問いは、重要な問いであろう。とはいえこの問いは、本発表の範囲を超えているものであり、アカデミックな哲学と、社会学、人類学、心理学といった他の諸学問を協働させることで成し遂げられるのみである。それは、「ひとが自明であると思っているものはすべて先入見（Vorurteile）であり、あらゆる先入見は伝統によって重ねられた沈殿から生じた不明瞭さである」という洞察に到達するための

「『哲学』と呼ばれる偉大な課題と理念」⁹⁰⁾なのである。これは、「未来の世代をつなぐ鎖である目標を原創設 (Urstiftung) することへと遡行的に問うことで、歴史を明らかにする」という課題である。すなわち、「その隠れた歴史の意味において、それが個人的で非歴史的な研究の地盤として役立つのが当然のこととみなされている、沈殿した概念体系を再活性化させる」⁹¹⁾という課題である。このような研究にもとづいてのみ、生活世界に対する「責任ある批判を遂行すること」⁹²⁾が可能になる。

フッサールによる危機の診断がなされて以来、この危機は克服されていないばかりか、その度を増大している。それは、とりわけ、科学的世界の成果が、新たな技術を通じて、生活世界の構造へといっそう深く浸透しているがゆえである。それゆえ、われわれはフッサールの警告に傾聴しなければならない。「科学の進歩は、洞察という財宝の点でわれわれを豊かにはしなかった。世界は、それによっていっそう理解できるものには寸毫もなっておらず、われわれにとっていっそう有用になったにすぎないのである」⁹³⁾。

註

- 1) 本稿は2014年3月15日、立命館大学において開催された間文化プロジェクトワークショップ“The Lifeworld and Sciences”におけるKim Tae-Hee(韓国・建国大学校教授)による発表原稿“Crisis of Life-Worldly Time: On the Basis of Husserl's Phenomenological Analyses”を邦訳したものである。
- 2) Husserl, E. *On the Phenomenology of the Consciousness of Internal Time (1893 - 1917)*. J.B. Brough (Trans.), Dordrecht 1991. p. 67.
- 3) Husserl (1991). p. 3.
- 4) Alves, P., “Objective Time and the Experience of Time: Husserl's Theory of Time in Light of Some Theses of A. Einstein's Special Theory of Relativity”, in: *Husserl Studies* 24/3, 2008. 205-229, p. 211.
- 5) Husserl (1991), p. 6.
- 6) Husserl (1991), p. 9
- 7) Husserl, E., *Die ‚Bernauer Manuskripte‘ über das Zeitbewußtsein (1917/18)*, R. Bernet, D. Lohmar (Hrsg.), Dordrecht 2001. p. 184. デイーマーによれば、「『主観的な』客観的時間」と「『客観的な』客観的時間」とが区別されねばならない。前者が各主観

性の内在的な時間であるのに対し、後者は自然科学的時間および間主観的時間（生活世界的時間）として区別されうる。(Diemer, A., 1965. *Edmund Husserl: Versuch einer systematischen Darstellung seiner Phänomenologie*, Meisenheim am Glan, p. 170) (Lohmar, D., "On the Constitution of the Time of the World: The Emergence of Objective Time on the Ground of Subjective Time", in: *New Contributions to Husserlian Phenomenology of Time*. Dordrecht 2010. 115-136, p. 118)

- 8) Husserl (1991), p. 72.
- 9) Husserl (1991), p. 114.
- 10) Husserl, E., *Experience and Judgment: Investigations in a Genealogy of Logic*, J. S. Churchill, K. Ameriks (Trans.), London 1973, p. 163.
- 11) Husserl, E., *The Crisis of European Sciences and Transcendental Phenomenology: An Introduction to Phenomenological Philosophy*, D. Carr (Trans.), Northwestern University Press Evanston 1970, p. 133.
- 12) Husserl, E., *Die Lebenswelt. Auslegungen der vorgegebenen Welt und ihrer Konstitution. Texte aus dem Nachlass (1916-1937)*, R. Sowa (Hrsg.), Dordrecht 2008, p. 575.
- 13) Husserl, E., *Zur Phänomenologie der Intersubjektivität. Texte aus dem Nachlass. Zweiter Teil: 1921-1928*. I. Kern (Hrsg.), Den Haag 1973, p. 360
- 14) (訳注)「生活世界」の語は、1917年あるいは1918年頃からフッサールの草稿において登場する。(Husserliana Bd. 4, 374f.)
- 15) Husserl (1970), p. 125.
- 16) Husserl (1970), p. 125.
- 17) Husserl (1970), p. 106.
- 18) Husserl (1970), p. 124.
- 19) Husserl (1970), p. 127.
- 20) Husserl (1970), p. 31.
- 21) Husserl (1970), p. 25.
- 22) Husserl (1970), p. 25.
- 23) Husserl (1970), p. 26.
- 24) Husserl (1970), p. 26.
- 25) Husserl (1970), p. 23.
- 26) Husserl (2008), p. 712
- 27) Husserl (1970), p. 51.
- 28) Husserl (1970), p. 48.
- 29) Husserl (1970), p. 46.
- 30) Husserl (2008), p. 142

- 31) Schutz, A., Luckmann, T., *The Structure of the Life-World*, Evanston: Northwestern University Press, 1973, p. 47
- 32) Husserl (1970), p. 50.
- 33) Husserl (1970), p. 27.
- 34) Husserl (1970), p. 32.
- 35) Husserl E., *Späte Texte über Zeitkonstitution (1929-1934). Die C-Manuskripte*, D. Lohmar (Hrsg.), Dordrecht 2006, p. 393
- 36) Husserl (1970), p. 293.
- 37) Lohmar (2010), p. 133
- 38) Husserl (2006), p. 400
- 39) Husserl (2006), p. 1
- 40) Fraser, J. T., "Human Temporality in a Nowless Universe", in: *Time & Society 1*, 1992. 159-173, p. 159
- 41) Husserl (2001), p. 294
- 42) Alves (2008) p. 221
- 43) Husserl E., *Studien zur Arithmetik und Geometrie. Texte aus dem Nachlass (1886-1901)*. I. Strohmeier (Hrsg.), Den Haag 1983, p. 390
- 44) Husserl (1983), p. 390
- 45) Husserl (2008), p. 143
- 46) Husserl (1970), p. 216.
- 47) Gander, H.-H., *Husserl-Lexikon*, Darmstadt 2010, pp. 81.
- 48) Husserl (1970), p. 221.
- 49) Husserl (1970), p. 32.
- 50) Held (1991), pp. 106
- 51) この問題については、デビッド・カーの次の論考を参照。"Carr, D., Husserl's Problematic Concept of the Life-World", in: *American Philosophical Quarterly 7/4*, 1970. 331-339; Claesges, U., "Zweideutigkeiten in Husserls Lebenswelt-Begriff", in: *Perspektiven transzendentalphänomenologischer Forschung*, Den Haag 1971. 85-101.
- 52) Husserl (1970), p. 139.
- 53) Husserl (1970), p. 138.
- 54) Husserl (1970), p. 131.
- 55) Husserl (1970), p. 138.
- 56) Husserl (1970), p. 133
- 57) Husserl (1970), p. 130
- 58) Husserl (1970), p. 131
- 59) Husserl (1970), p. 130

- 60) Husserl (1970), pp. 130
- 61) Husserl (1970), p. 131
- 62) Husserl (1970), p. 131
- 63) Husserl (1970), p. 127
- 64) Husserl (1970), p. 173
- 65) Husserl (1970), p. 173
- 66) Husserl (1970), p. 174
- 67) Husserl (1970), p. 174
- 68) Sowa R., "Husserls Idee einer nicht-empirischen Wissenschaft von der Lebenswelt", in: *Husserl Studies* 26, 2010. 49-66, p. 49
- 69) Husserl (1970), p. 139
- 70) Husserl (1970), p. 140
- 71) Husserl (1970), p. 139
- 72) Husserl (1970), p. 139
- 73) Husserl (1970), p. 142
- 74) Husserl (1991), p. 94.
- 75) Lohmar (2010), p. 133.
- 76) Nowotny, H., "Time and Social Theory: Towards a Social Theory of Time", in: *Time & Society* 1, 1992 421-454, p. 426.
- 77) Nowotny (1992) p. 426.
- 78) Sowa R., 2008. "Einleitung des Herausgebers", in: *Die Lebenswelt. Auslegungen der vorgegebenen Welt und ihrer Konstitution. Texte aus dem Nachlass (1916-1937)*. Dordrecht: I-LXXXII, p. lxxvii.
- 79) Nowotny (1992) p. 425.
- 80) Husserl (1970), p. 136.
- 81) Husserl (1970), p. 136.
- 82) Husserl (1970), p. 137.
- 83) Husserl (2008), p. 573.
- 84) Husserl (2008), p. pp. 573 .
- 85) Husserl (2008), p. pp. 539.
- 86) Husserl (2008), p. 576
- 87) Ströker, E., "Lebenswelt durch Wissenschaft", in: *Protozoziologie im Kontext: Lebenswelt und System in Philosophie und Soziologie*, Würzburg 1996. 163-183, pp. 175.
- 88) Husserl (1970), p. 49
- 89) Husserl (1970), p. 216

- 90) Husserl (1970), p. 72
 91) Husserl (1970), p. 71
 92) Husserl (1970), p. 72
 93) Husserl E., *Ideas Pertaining to a Pure Phenomenology and to a Phenomenological Philosophy. Third Book: Phenomenology and the Foundation of the Sciences*, T. Klein, W. Pohl (Trans.). The Hague 1980, p. 82.

参考文献

- Alves, P., "Objective Time and the Experience of Time: Husserl's Theory of Time in Light of Some Theses of A. Einstein's Special Theory of Relativity", in: *Husserl Studies* 24/3, 2008. 205-229
- Carr, D., "Husserl's Problematic Concept of the Life-World", in: *American Philosophical Quarterly* 7/4, 1970. 331-339
- Claesges, U., "Zweideutigkeiten in Husserls Lebenswelt-Begriff", in: *Perspektiven transzendentalphänomenologischer Forschung*, Den Haag 1971. 85-101
- Diemer, A., 1965. *Edmund Husserl: Versuch einer systematischen Darstellung seiner Phänomenologie*, Meisenheim am Glan
- Fraser, J. T., "Human Temporality in a Nowless Universe", in: *Time & Society* 1, 1992. 159-173
- Gander, H.-H., *Husserl-Lexikon*, Darmstadt 2010.
- Held, H., "Husserls neue Einführung in die Philosophie: Der Begriff der Lebenswelt", in: *Lebenswelt und Wissenschaft. Studien zum Verhältnis von Phänomenologie und Wissenschaftstheorie*. Bonn 1991. 79-113
- Husserl, E. *The Crisis of European Sciences and Transcendental Phenomenology: An Introduction to Phenomenological Philosophy*, D. Carr (Trans.), Northwestern University Press Evanston 1970.
- _____ *Zur Phänomenologie der Intersubjektivität. Texte aus dem Nachlass. Zweiter Teil: 1921-1928*. I. Kern (Hrsg.), Den Haag 1973.
- _____ *Experience and Judgment: Investigations in a Genealogy of Logic*, J. S. Churchill, K. Ameriks (Trans.), London 1973.
- _____ *Ideas Pertaining to a Pure Phenomenology and to a Phenomenological Philosophy. Third Book: Phenomenology and the Foundation of the Sciences*, T. Klein, W. Pohl (Trans.). The Hague 1980.
- _____ *Studien zur Arithmetik und Geometrie. Texte aus dem Nachlass (1886-1901)*. I. Strohmeyer (Hrsg.), Den Haag 1983.
- _____ *On the Phenomenology of the Consciousness of Internal Time (1893 - 1917)*.

- J.B. Brough (Trans.), Dordrecht 1991.
- _____ *Die ‚Bernauer Manuskripte‘ über das Zeitbewußtsein(1917/18)*, R. Bernet, D. Lohmar (Hrsg.), Dordrecht 2001.
- _____ *Späte Texte über Zeitkonstitution(1929-1934). Die C-Manuskripte*, D. Lohmar (Hrsg.), Dordrecht 2006.
- _____ *Die Lebenswelt. Auslegungen der vorgegebenen Welt und ihrer Konstitution. Texte aus dem Nachlass (1916-1937)*, R. Sowa (Hrsg.), Dordrecht 2008
- Lohmar, D., “On the Constitution of the Time of the World: The Emergence of Objective Time on the Ground of Subjective Time”, in: *New Contributions to Husserlian Phenomenology of Time*. Dordrecht 2010. 115-136
- Nowotny, H., “Time and Social Theory: Towards a Social Theory of Time”, in: *Time & Society 1*, 1992 421-454
- Schutz, A., Luckmann, T., *The Structure of the Life-World*, Evanston: Northwestern University Press, 1973.
- Sowa R., 2008. “Einleitung des Herausgebers”, in: *Die Lebenswelt. Auslegungen der vorgegebenen Welt und ihrer Konstitution. Texte aus dem Nachlass (1916-1937)*. Dordrecht: I-LXXXII
- Sowa R., “Husserls Idee einer nicht-empirischen Wissenschaft von der Lebenswelt”, in: *Husserl Studies 26*, 2010. 49-66
- Ströker, E., “Lebenswelt durch Wissenschaft”, in: *Protozoologie im Kontext: Lebenswelt und System in Philosophie und Soziologie*, Würzburg 1996. 163-183

